

摂関期における政務と勘文（調査報告）

—『小右記』にみる改元定を例として—

重田 香澄

はじめに

公卿たちが、政務運営上の意志決定を行う際に諸官司・諸道に提出させていた勘文については、編纂物や古記録に多くの事例を見ることができる。そして、そのなかでも特徴的なものを中心に、それぞれの分野ごとに研究が重ねられている¹。

勘文の何たるか、また種々の勘文の性質・分類については、夙に布施弥平治氏が整理されている²。すなわち、名称上の分類として、勘申の内容を示すものと勘申するものの名をしめすもの、また勘申主体による分類として諸司勘文と諸道勘文、さらに進める時機による分類として、定期的に進める勘文と臨時に進める勘文、としておられる。

これらの勘文は、勘文成立当時だけでなく、それ以降も一定の意味を持って利用されていたことが窺える。訴訟に際して作成されたものはその後も証拠書類として勝訴側に保管されていたことや³、『諸道勘文』に類するものとみられる「類聚諸道勘文」が、「可為職事之者可必持之文」として、『貫首秘抄』に載せられていることは、その好例といえよう。

また、摂関期の貴族の日記にも、勘文を全文、ともすると書式もそのままに引用・書写した記述がみられることが少なくない。この場合、前に掲げた布施氏の整理を借ると、特に臨時に進める勘文について、全文引用がされることが多いようである。貴族が日記中に、彼らの関心や重要性の認識に従って、様々な記録・書籍を引用・参照することはよくあることとはいえ、全文となると事例はそう多くない。このような書き留め方をされるには、それなりの重要性があると考えた方がよからう。

勘文の重要性が何に因るかを考えると、まず頭に浮かぶのが利便性であろう。あるテーマに関する情報が一つにまとめられて便利だからというのは、編纂物よりもその原史料の方が残りにくいことを考えるまでもなく、重要性の根拠たり得る。しかも情報源の情報は膨大で、勘文の情報を再現することは容易ではない⁴。しかし、それだけであったならば、貴族の日記にわざわざ全文引用などされないのではないか。利便性と、再現性の低さ以外にも何かがあったと考えるの

が妥当であろう。

ここで問題としたいのが、政務運営上の勘文の役割である。これについては、明法勘文の持つ法的拘束力への関心から、明法道系の勘文に関する分析は行われている⁵。しかし、それ以外の事例についての検討が乏しく、勘文の持つ「重要性」は自明のものとして議論の一部に組み込まれてしまっていることが多い。

以上のことをふまえ、本稿では、改元定における年号勘文を例に、勘文の使われ方の検討を通して、勘文がどういう存在であったのか、特に情報の信頼度とその再現性の低さ、閲覧機会の有無について確認し、考えることとしたい。具体的には、まず、改元定の手順を確認し、そこに勘文がどう関わっていたのかを観察する。その上で藤原実資の日記『小右記』に書かれた改元定関連記事を時系列にいくつか取り上げ、記主の身分の変化と記述内容の変化を追い、そこに勘文がどう現れるかを検討して、勘文が摂関期の貴族社会において持っていた意味を考えたい。

1. 改元定と年号勘文

改元に関しては、先学の研究が多くある⁶。年号の傾向や改元の動機、その推移等についてはそちらに譲るとして、ここでは改元定の次第の、どこに年号勘文が出てくるか、年号勘文がどういう体裁のものであったかを確認したい。

まず『江家次第』改元事を参考に、改元定の手順を確認しておく、はじめに、改元を行うよう指示を受けた大臣が、文章博士等に年号勘文の提出を指示する。勘文は上卿の大臣に提出され、大臣はそれを摂政・関白に見せた後、天皇へ奏聞する。その後、改元定の仰せと共に勘文が返し下され、公卿たちが各候補の良し悪しを検討し、絞り込んだ結果を奏上、天皇が最終的な判断を下し、それを受けて公卿たちがもう一度奏上して年号が決定。その後、改元の詔書作成へと移っていく。

年号勘文は公卿たちが定に入る前に、上卿のもとに集められ、そこから摂関を経て天皇に見せられるものであることがわかる。

『江家次第』には年号勘文の書式も載せられている。

今更の感も否めないが、行論の都合上、次に掲げておく。

勘申年号事

々々

其書曰々々

々々

其書曰々々

右依宣旨勘申如件

官兼官姓朝臣名

新しい年号の候補の字句一つ目が挙げられ、続いてその字句がどの本のどういうところに使われているかが書き添えられる。二つ目以下の候補についても同じように書かれていく。最後に宣旨を受けて勘申した旨を書き添えて結び、勘申した人の名前が書かれること自体は特に問題はない。ただ、ここで注意したいのが、わざわざ年号候補の字句の出典が記されていることである。このことから、年号候補となる字句が、どの本のどういうところにあるのかも重要だったことが窺える。

改元定における年号勘文の位置について、興味深いのが、長和改元時（1012）の『小右記』の記述である。ここにその全文を載せる⁷。

十二月廿五日、戊子、詣左府、相府云、令参内、可定申改元事、年号両博士^{寛弘}、勘申也、内々所見、故匡衡大宮院御時所勘申之〔者カ〕寛仁・寛弘也、寛仁最吉、而仁字有諱、仍不被用、彼勘文不能求出、件寛仁勘文可勘申之由度々仰両儒、而申云、寛仁文書不得引出者、予云、漢書帝紀文云、寛仁愛人、意額〔豁〕如也、相府驚取遣帝紀、開見其文、黄昏左府以下参内、頭中將^{公信}、下給年号勘文、^{西〔兩〕儒連署}於左府可令諸卿定申者、勘申云、大初・政和・長和、諸卿大初・政和不宜、此中長和頗宜、和字不快云々、左府云、寛仁吉年号也、而無儒勘文、為之如何、卿相云、仮令雖吉年号文、以博士不勘申、不可定申云々、仍被養〔奏〕長和頗宜之由、即被仰可用長和之由、

まず点線部、訪ねてきた藤原実資に、藤原道長が、寛仁の年号がいいと思うのだが、勘文を作成する儒者がそれを勘申してくれない、典拠もわからない、というようなことをこぼしている。するとそれを聞いた実資が、「予云…」以下で典拠が『漢書』にあることを示し、道長もそれを確認している。そして、夕方から改元定が行われるのだが、ここで注目したいのが実線部分である。ここで道長は、先刻実資から教示された「寛仁」がいいのではないかと持ちかけるのだが、定に出席した諸卿は、「今回の定の為に作成された勘文に載せ

られた字句ではないから」という理由でそれを退けるのである。

ここには、勘文に載せられて初めて議論・検討の対象になる、といった認識を見て取れる。手続き上の正当性が、勘文に載せられた情報の正当性・正統性に繋がっているとみることができるだろう。

以上、年号勘文は、改元定に先立って文章博士等に勘申が命じられ、上卿の大臣の許に集められた後、天皇に奏聞され、その後の定の場で諸卿に見せられたものであった。そして、それは正当な手続きを経たものとして、所載情報の価値へと繋がっていたといえよう。

2. 年号勘文の再利用

また、このような年号勘文は、改元定が終わってからも一定の重要性を保持していたものとみられる。たとえば、さきに触れたとおり、長和改元時には、道長が前回（寛弘）の改元定の時に候補に挙がっていたが忌諱のために採られなかった「寛仁」にしようと思って、まずその時の勘文を探している。

長徳改元時（994）には、

頭弁云、昨日被定改元事、長徳、故江中納言維時勘申、邑上御時勘文云々、

とあるように、村上天皇の時の改元定に出された勘文が使われていた⁸。このあとに、過去に採用されなかったものをそれでも候補として提出することに対する実資の非難も載せられているが、勘文のその後の使われ方を察するには十分であろう。

このことから、手軽に必要なとおぼしき文言を探り出せるものとして、一定の必要性はあったものとみられる。

しかも長和度の場合、道長は勿論、このとき勘文を奉った菅原宣義・大江通直も、前に大江匡衡が勘申した「寛仁」の典拠が見つけれずにいた⁹。そのため年号勘文に「寛仁」を載せることができないと言っている。このことから、先に『江家次第』所載の年号勘文雛形で見たように、典拠も重要であったことも裏付けられる¹⁰。また、一旦勘文所載の情報のまとまりが失われてしまうと、再現することはたとえその道のものであっても容易ではないことが窺われる。

このように、年号勘文に載せられた情報は、公式に認められるべき情報を盛り込んだものとして有用であると共に、その情報は再現性が高いとは言えないものであった。ゆえに、定の後も一定の必要性をみとめられるものであったのである。

3. 『小右記』中の改元記事と年号勘文

前章までで、勘文の正統性・利便性と、再現性の低さ、及びそこからくる事後の必要性とを確認した。次に、その情報の閲覧可能性について検討していきたい。

本稿で参照する『小右記』は、藤原実資が蔵人頭として天皇と摂関、大臣の間を往反していた頃から、右大臣を長く勤め、多く上卿を勤めるところまで、約50年間分の詳細な記事が断続的に残っている¹¹。そのため、実資の身分に応じた記述内容の変化から、どういふことをどういふ身分の人が知り得たのかを窺うことができる。

ここでは、改元に関する記事を、いくつか順を追って見ていくことで、どの身分の時に何を知ることができて何は知ることができなかったのか、そして、年号勘文は其中でどう位置づけられるのかを考えていく。『小右記』が書かれていた期間に行われた改元は15回¹²、そのうち、逸文も含めて『小右記』に関連記事が残っているのが10回ある¹³。今回は実資が蔵人頭だったとき、参議だったとき、大納言だったとき、大臣だったときについて、それぞれ一つずつ取り上げていく。

まず、蔵人頭の時期。改元定について知ることのできることは非常に限られていたものとみられる。次は、実資が蔵人頭だった時期の寛和改元時（985）の記事である¹⁴。

廿七日、辛丑、参内、卯時水鳥集宜秋門陣前桜樹、召陰陽師令奉仕御占、盜・兵・火事・疫癘者、今日有改元、寛和、皇太后宮大夫重信奏詔書草、御覧了返給、奏清書、以惟成令伝奏、御画了返給、余候宿、伝聞、藤大納言、正三位中将、於右近馬場有競馬事云々、改元関係の記述に実線を引いたが、「今日改元定有」と素っ気ない。蔵人頭は、天皇と摂関、上卿の間の連絡に携わり、機密に関わっても、議政官ではない。そのため、定の内容にはあまり触れられなかったものと考えられよう。

状況が変わってくるのが参議になってからで、定の内容に関する記述が見えてくる。つまり、定の内容まで知ることができるようになったということである。実資が参議になり、周りと色々と情報交換をするようになった頃の、長徳改元（994）の記事（前章にて一部掲載）を見ると、

二月廿三日、頭弁云、昨日被定改元事、長徳、故江中納言維時勘申、邑上御時勘文云々、朝綱、文時後生等勘文同被下也、尚以当時之人可勘申歟、藤相公示送云、長徳似有俗忌、可謂長毒歟、又日

本年号徳字、只天徳也、彼年有疫癘、又有内裡焼亡者、

とある¹⁵。このとき、実資は改元定には出席していなかったらしいが、定の翌日、以後もしきりに情報のやりとりをする実の従兄弟（義理の甥）で、このとき参議の藤原公任から、「『長徳』は音が良くない。また、『徳』の字の付く年号は縁起が良くない」など、定で行われた議論に関すると見られる公任の意見を聞き知っている（実線部）。このとき、頭弁の源俊賢も実資の許に改元定に関する情報をもたらしているが（点線部、前章で言及）、こちらは決まった年号と年号勘文に関する概略に留まり、定の内容に踏み込んではいない。蔵人頭と議政官の差を如実に表していると言える。

公卿でも上位の大納言となり、政治的に重要な地位を占めるようになると、定の内容のみならず、その舞台裏まで知ることができるようになり、日記の記述も詳細になる。この時期の記事として1章でも触れた長和改元（1012）の記事を見てみる¹⁶。前にも言及しているが、全文掲げておく。

十二月廿五日、戊子、詣左府、相府云、令参内、可定申改元事、年号両博士宣義、通直、勘申也、内々所見、故匡衡大宮院御時所勘申之〔者カ〕寛仁・寛弘也、寛仁最吉、而仁字有諱、仍不被用、彼勘文不能求出、件寛仁勘文可勘申之由度々仰両儒、而申云、寛仁文書不得引出者、予云、漢書帝紀文云、寛仁愛人、意額〔豁〕如也、相府驚取遣帝紀、開見其文、黄昏左府以下参内、頭中將公信、下給年号勘文、西〔圖〕備連署、於左府可令諸卿定申者、勘申云、大初・政和・長和、諸卿大初・政和不宜、此中長和頗宜、和字不快云々、左府云、寛仁吉年号也、而無儒勘文、為之如何、卿相云、仮令雖吉年号文、以博士不勘申、不可定申云々、仍被養〔奏〕長和頗宜之由、即被仰可用長和之由、

前章までで言及した「寛仁」の年号勘文を探し続ける定直前の道長の様子から、実線部、年号勘文に「大初」・「政和」・「長和」が挙げられていたこと、その中では「長和」が宜しかろうということ、その後、1章でも紹介したように、道長が勘文なしで「寛仁」を推したが容れられず、文章博士が勘申した長和に年号が決まるまで、詳しく書かれている。

ただ、ここで注意しておきたいのは実線部、年号勘文の内容である。ここでも年号の候補は記載されているが、その出典は記載されていない。しかも、肝心の新年号候補は、改元定前の記述では出てこない。「寛仁」が候補に挙がっていないことがわかるのみであ

る。年号勘文の内容は、定のときになるまで、実資にはわかっていないものと見られるのである。このようなことから、単に定に出席する公卿である間は、勘文は定場でしか見られないものであったと考えられる。

年号勘文が事前に見られるようになるのは、大臣となり、改元定の上卿を勤めるようになってからであった。実資は右大臣だったが、左大臣である藤原頼通は関白・摂政を兼ねていたため、一上として改元を含めた重要案件の上卿をしていた。

そうなると、1章で改元の次第を確認したとおり、改元に当たってまず大臣の許に持ってこられる年号勘文が、実資の許に来るようになる。次は実資が右大臣となった後、万寿へと改元する年（1024）の記事である¹⁷。

廿三日、己酉、誦經三ヶ寺、清水・紙・北対西廊下戸内納雑物、盗人切壊北壁取手作布十一段、又搜主税允師光宿置皮籠内物、未知何物、所遺物文書一結并屏風面・手作布六段・帶二腰・櫛一束、
藤宰相持来 年号勘文

勘申

年号事

承天尚書曰、各守爾典、以承天休、守其常法、承天美道也。

地寧孝子曰、天得一以清、地得一以寧、（定）地安寧而不動搖、王侯得一以貞也。

右依宣旨勘申如件、

参議兼伊予權守藤原朝臣広業

右〔大カ〕外記頼隆云、義忠朝臣云、申明日可進申〔由カ〕、禪閣日者被勞勢〔熱カ〕発、從昨日申剋許惱氣不輕、亦関白自昨日夕被悩、藤宰相説、頼隆云、右頭中将云、関白悩氣非風病、似時給〔行〕、今日可被試、又云、内御読経被延行者、実線部で、七月の改元を控えたその年の五月二十三日、藤原広業が年号勘文を実資の許に持ってきている。そして、実資はこれを全文書き写しているのである。点線で囲んだところが広業持参の年号勘文なのだが、1章で確認した『江家次第』所載の年号勘文雛形とほとんど同じであることがわかる。しかも、「藤原義忠は明日持ってくる」とあるように、まず全て上卿である実資のもとに集められていたことも窺える。

この年の改元定当日、実資の関心は定の内容よりも改元に伴う赦の対象の方にあつたらしく、定の様子を窺い知ることにはできない。しかし、長和改元時の記述と比べると、定の前に勘文を読み、しかも書き写すことができるのは大臣となり、上卿を勤めるようになってからだということはわかるであろう。

これらのことから、勘文を一旦手許に留め、使える情報としてストック化できる人は、上卿、摂政・関白と、勘文作成者辺りに限られると言えそうである。勘文として編集された情報は、誰もが容易に手にできるとはいえないものだったとみることができるだろう。

おわりに

以上見てきたように、改元は、まず漢籍を調べて新年号の候補の勘文が作成され、それを公卿達が定で絞り込み、天皇が最終決定をして詔書作成、という流れで行われた。勘文作成者と定の構成員である公卿以外の人が新年号候補について詳細を知り得ないのは勿論のこと、その公卿の中でさえ、上卿とそうでない者とは情報への関わり方に差があった。このことは、『小右記』改元関連記事の記述の詳しさが、記主実資の身分の変化と対応していることから窺うことができたものと思う。

特に、作成者以外で年号勘文を手元に一旦留めておけるのは摂政・関白と上卿くらいで、年号勘文の情報は希少価値の高いものであった。しかも再現性が低いにもかかわらず、後日利用価値が出てくる可能性も大いにあるものだったので、実資も日記中に年号勘文本文を書き写したりしていたと言える。

これは年号勘文以外の勘文についても言えることのように、実資は日記中によく勘文を書き写している。また、実頼の『清慎公記』に同じように書き写されていた勘文を、実資が参照していることもある¹⁸。

このように、貴族にとって、勘文は、具体的なテーマごとに情報がまとめられていて実用的ではあったが、誰でも容易に集められるようなものではなく、また政務処理手続き上誰もが入手できる情報という訳ではなかった。つまり、利用価値が高い上に貴重な情報であったわけである。そのため、書き留めることの可能な立場の人によって、注意して書き留められる情報であったと言える。摂関期以降、主に院政期には、勘文を類聚したものが多く出る。その背景には勘文の上記の性格からくる需要の存在があったと考えられる。

ただし、そのような需要があったにせよ、本来なかなか外に出なかった勘文情報が、院政期に入ると類聚可能な状況になったということはこの問題を少々難しくする。官司請負制の成立や、摂関・院への情報上の奉仕¹⁹、院政期公卿の、諸道の保持する情報への関心等²⁰への目配りが必要となるであろうが、これは今後の課題としたい。

注

- 1 例えば、明法道の進める勘文については、布施弥平治「罪名勘文」（『日本法学』22-3、1956）、小川清太郎「着鈇勘文」（『國學院法学』5-2、1967）、「役畢勘文一付記、獄囚帳一」（『國學院法学』7-2、1969）、庄司浩「着鈇勘文について」（『立正史学』60、1986）、瀬賀正博「明法勘文機能論」（『法制史研究』49、1999）、梅田康夫「平安後期の明法勘文について」（『金沢法学』50-2、2008）など、これに院政期を中心とした裁判制度に関する研究の中での研究を含めると膨大な蓄積がある。他、革命勘文に関する佐藤均『革命・革命勘文と改元の研究』（佐藤均著作集刊行会、1991）、水口幹記「天文・祥瑞の典拠とその意味－『革命勘文』における類書・図書の利用について－」（『日本古代漢籍受容の史的研究』所収、汲古書院、2005。初出1999）など、天曆三年神祇官勘文についての、所功「天曆神祇官勘文」（『国書逸文研究』7、1981。補訂され『平安朝儀式書成立史の研究』国書刊行会、1985）、二宮正彦「天曆三年の「神祇官勘文」の一考察」（『史泉』57、1982）、三橋広延「天曆三年「神祇官勘文」所引国史記事に見る『類聚国史』の原形－『三代実録』の記事分類と菅原道真－」（『国史学』159、1996）などや、天平九年典藥寮勘文についての、服部敏良『奈良時代医学の研究』（科学書院、1980）、新村拓『日本医療社会史の研究』丸山裕美子「『医心方』の世界へ－天平九年の典藥寮勘文と太政官符－」（『日本古代の医療制度』所収、名著刊行会、1988）など、長寛勘文についての、植田彰「長寛勘文について－清原頼業論の一節として－」（『史学雑誌』52-8、）、戸川点「長寛勘文にあらわれた荘園整理令－保元令と国司申請令のあいだ－」（『日本史研究』335、1990）など。また、川尻秋生「日本古代における「議」」（『史学雑誌』110-3、2001）では、文人官僚が直接天皇に奏上できた「議」が、政務の在り方と共に勘文へと場と役割を変えていくことを指摘されている。
- 2 布施前掲1論文。
- 3 鈴木江津子「東寺領川合・大国庄を見直す－伝存する六通の勘文－」（『歴史民俗資料学研究』1、1996）など。
- 4 例えば、松園斉「外記局の変質と外記日記」（『日記の家』所収、吉川弘文館、1997）では、過去の外記日記の内容に通暁した外記とそうでない外記の分化、局務的「大外記」の形成を指摘するが、その一因として適切な事例の検索に当たっての困難を指摘している。
- 5 前掲1諸論考の他、棚橋光男『中世成立期の法と国家』（塙書房、1983）、上杉和彦『日本中世法体系成立史論』（校倉書房、1996）、法制史という枠とは多少ずれるが龍福義友『日記の思考』（平凡社、1995）など。
- 6 佐藤前掲1のほか、橋本義彦「改元雑考」（『日本歴史』300、1973）、重松明久「古代における祥瑞思想の展開と改元」（『地域文化研究』3、1977）。
- 7 『元秘別録』所引『小右記』長和元年(1012)十二月二十五日条逸文。
- 8 『元秘別録』所引『小右記』長徳元年(994)二月二十三

- 日条逸文。
- 9 ちなみに、実資は寛弘改元時の定には出席しておらず、自身の人間関係の中から「寛仁」の典拠を入手したと思われる。
 - 10 池田源太「平安期に於ける「本文」を権威とする学問形態と有職故実」（古代学協会『延喜天曆時代の研究』所収、吉川弘文館、1969、龍福前掲5など。
 - 11 『小右記』及び藤原実資についても、様々な研究がある。史料論的なことについては、桃裕行「小右記諸本の研究」（『桃裕行著作集』4、思文閣出版、1988、初出1971）、大日本古記録『小右記』11解題など。実資自身についても、赤木志津子「撰関家と小野宮家」（『平安貴族の生活と文化』所収、パルトス社、1964）、吉田早苗「藤原実資の家族」（『日本歴史』330、1975）、龍谷寿「藤原実資論－円融・花山・一条天皇時代－」（『古代文化』30－4・5、1978）ほか。
 - 12 永観、寛和、永延、永祚、正暦、長徳、長保、寛弘、長和、寛仁、治安、万寿、長元、長暦、長久。
 - 13 永観、長保、寛弘、寛仁、長暦を除いたもの。
 - 14 『小右記』寛和元年(985)四月二十七日条。
 - 15 『元秘別録』所引『小右記』長徳元年(994)二月二十三日条逸文。
 - 16 『元秘別録』所引『小右記』長和元年(1012)十二月二十五日条逸文。
 - 17 『小右記』万寿元年（1024）五月二十三日条。
 - 18 例えば、『小右記』寛弘八年(1011)九月一日条、
一日、辛未、早旦臨河辺解除、大嘗会年不奉御燈事、諸人不知、余又不知、只臨河頭行例祓、而隔年記見故殿安和元年御記、已有不可奉之由、是三代実録文也、為後々所注付、式文只有齋王向伊勢年事、仍諸人不知也、
安和元年九月二日、九月御燈止事、連量勘申云々、仍奉勘文案
勘申、有大嘗会之年、停九月三日御燈之例事、三代実録^三、云、貞観元年九月三日、乙卯、停御燈潔齋、以有大嘗会事也、同実録^四、元慶八年九月三日、庚申、停御齋焼燈、仁和四年日記云、九月三日、丁酉、無内裏御燈事、承平二年日記云、九月三日、壬午、依穢雖無御燈依例廢務、
では、「安和元年…」からが『清慎公記』の文、「勘申、…」からがそこに引かれた鴨連量の勘文案になっている。勘文案においては、改行こそないが、「勘申…事」として、以下に該当する事例を列挙していく様は基本的な勘文の書式であり、そのまま『清慎公記』中に書き写したものと見てよからう。尚、安和元年の時点で、実頼は関白であった。故に勘文案を事前に見て書き留めることができたと考えらるべきであろう。
 - 19 松園前掲4、『王朝日記論』（法政大学出版局、2006）など。
 - 20 上杉・龍福前掲5など。

重田 香澄：摂関期における政務と勘文（調査報告）

しげた かすみ／お茶の水女子大学大学院 人間文化研究科 国際日本学専攻